

# 造形遊びの教育的意義 —同一材料に基づいた造形活動と空間把握の諸相を通して—

## The Educational Value of Zōkei-asobi: Case Studies Using Identical Materials of Art Activities and Spatial Perception

蝦 名 敦 子\*

Atsuko EBINA\*

### 要 旨

本研究は、造形遊びの教育的意義について、まず材料のあり方から検討する。同一材料を使って児童のみならず、大学生や教員、幼児に対して実践をするとともに、その際に課したワークシートを比較考察した。紙を丸めた一本の棒と、その両端を折ってリング状で繋ぐ方法から、思いがけない多様な形が生まれた。このような活動は、体の成長とともに育成されるべき子どもの空間認識にとって、大切な行為となる。「造形遊び」は図画工作科の表現の一つに位置づけられているが、造形活動とともに空間認識（認知）力が育まれる点に、重要な意味が見出される。

**Key words**：造形遊び、アート空間把握、材料

### 1 はじめに

本考察は、2015年から今年2016年にかけて様々な年代を対象に実施した「造形遊び」を振り返り、その活動の様子を紹介しながら、最終的に残った作品と周囲の空間との関わり方—空間把握の諸相に注目する。併せてワークシートの検証を行い、その造形遊びの可能性、教育的意義について考察するものである。

2015年に弘前大学教育学部附属小学校1年、3年、6年生に対して、筆者が独自に考案した材料による造形遊びの授業が行われた。それは小学校高学年を対象とした題材であったが、6年生が実施した授業の様子を見た1年生、3年生のそれぞれの教員がそれに触発されて低・中学年にも実践した<sup>1)</sup>。その材料とは、新聞紙やチラシなど古紙を使用し、それらを丸めて棒状にして使用するものである。棒状にすることは、すでに教科書等でも紹介されているのであるが<sup>2)</sup>、とくにこの材料を特徴づけているのは、棒の両端を折り曲げテープで留めてリング状にし、そのリングに棒を通して形を繋いでいくことを条件づけたことである（ただし、中学年（小3）に対しては、ポスターとわっか（セロハンテープの紙芯）が使用された）。この材料に

基づいて、どのような造形活動が行われるかに注目する。

提案した材料の扱いは、授業実践を行う教師にある程度自由に委ねられている。対象学年に応じて多少異なった条件で授業が展開されたが、紙を丸めて使用することは基本的に変わらない。本考察では、小学校のみその教育内容となっている造形遊びについて、大人の実践—大学生と現職教員、また展覧会に集まってきた幼児の活動にも注目する。他の年代でも同一の材料による造形遊びを幅広く実践することによって、小学生のみに課せられているはずの造形遊びの意義について、明らかにしようとする。小学校での造形活動については第1章で取り上げる。

第2章では、筆者が直接行った教育学部の学生を対象とした実践がテーマとなる。2015年後期に、小学校教員を目指す大学2・3年生を対象に実施した。その際に見られた造形活動に注目しながら、ワークシートから彼らの造形遊び観を抽出する。

第3章では、2016年に実施された現職教員に対して行った造形遊びがテーマとなり、弘前市造形教育研修会の参加者と、免許状更新講習での実践を取り上げる。とくに後者については、講義内で実践を提示

---

\* 弘前大学教育学部美術教育講座  
Department of Art Education, Faculty of Education, Hirosaki University

した折に、受講者の方から要望が出て行われたものである。そこで実施された活動の実態を振り返るとともに、ワークシートに現れた彼らの造形遊び観を検討する。

第4章では、これまでの成果として筆者が企画し開催した「みんなで造形遊び」展（2016年8月1～3日）を取り上げる。パブリックスペースで造形遊びの展覧会（ワークショップ）を行った。造形遊びを学校の中だけで完結させるのではなく、一般に向けて広く知ってもらいたいという意図がある。この展覧会場には、興味を持った保護者が子どもを連れて参加した。その結果、小学生のみではなく、入学前の幼児～2歳児から5歳児までの活動を観察することができた。

加えて小学1年から6年生に至るまでの児童の活動と同時に、兄弟や友達同士、偶然その場に居合わせた子ども同士の協力など、学級内での活動とは異なった協働関係が見られた。それは、評価を前提とする学校教育とは異なる環境で造形する、子どもの姿である。夏休みということもあり、引率の保護者も一緒に活動に加わった。保護者からもワークシートが得られており、それに現れた造形遊び観を抽出し、その特徴を考察する。

このように本材料を使用した造形遊びは短期間に、幅広い年代に実施されたことになる。それは2歳の幼児から、50代の教員にまで及んだ。本稿では、それらの実践を踏まえて活動の様子を見据えつつ、造形遊びの特質—とくに空間認識に注目することになる。本材料を通した造形遊びの活動が彼らにとって、どのように受け止められたのか。活動の有り様とともに空間把握の実態に注目する。併せてそのワークシートに確認された造形遊び観から、教育的意義を明らかにしたい。

## 2 小学生を対象とした造形遊びの実践

### (1) 造形活動の実態

造形遊びはプロセスが重要であり、最終的な作品はむしろ授業の終了とともに片付けられ、目の前から消える。しかしながら、本考察においては、空間把握という視点から、活動のプロセスを重視しながらも、最終的に活動が終了して手から離れた状態の造形物を取り上げ、低・中・高学年をそれぞれ対比させたいと思う。

- 1) 小学1年生（2時間、1クラス33名、題材名「つなげて つなげて」）

材料にはB3大のチラシを使用。丸めて棒状にし、

両端をリング状にして繋いでいく。授業では繋ぎ方を説明しながら、形として最も単純な三角形を作るところまで一緒に行われたが、そこから活動が多様に進んだ。

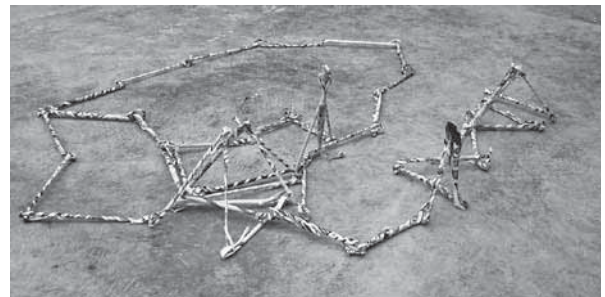
活動の特徴として、児童は積極的に繋げ、教室から廊下へと移動し（図1-1）、その繋げた長さを廊下の奥行きとともに確かめようとする。そしてさらに中庭（パティオ）へと場所を変えた（図1-2）。そこでの形状に合わせたり、複雑に「繋ぐ形」ができていった（図1-3）。一本の棒から三角形が作られ、さらに三角錐や中には複雑な立体物へと進む（図1-4）。自分が持って走ることで、「なびく形」を見つけた女子もいる（図1-5）。



(図1-1)



(図1-2)



(図1-3)



(図1-4)



(図1-5)

- 2) 小学3年生（2時間、1クラス33名、題材名「紙の棒とわっかで・・・」）

材料にはポスター（B3, A3）とわっか（セロハンテープの紙芯）が用いられる。紙を丸めるところから授業は始まり、子どもたちはそれを繋げて長くし、すぐにその棒を天井に向けるなどして周囲の空間感を棒



の長さで確かめ出した（図2-1）。まもなくある児童がわっかを使って立つ形を見つける（図2-2）。わっかに3本入れて固定されることがわかると、その方法が他のグループにも取り入れられ、共有されていく。そして接着していないので、何度も作り変えられた。

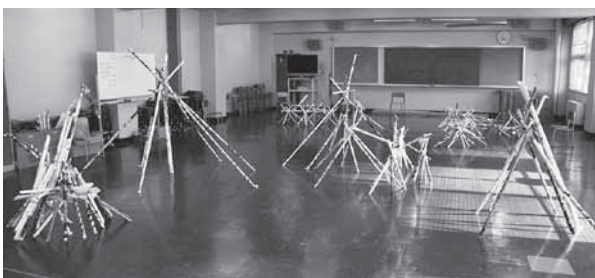
小学3年生が見つけた形として「立つ形」があり、それが家のような空間になる。また「立つ形」がさらに積み上げられ、複雑な形の立体物（オブジェ）へと展開する（図2-3）。



(図2-1)



(図2-2)



(図2-3)

### 3) 小学6年生（4時間、1クラス33名、題材名「パティオをリメイク！」）

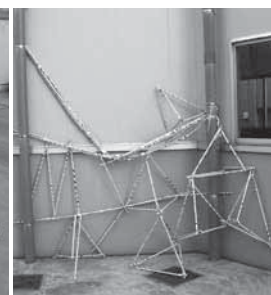
材料には新聞紙を2枚重ねて丸め棒状にする。立体として最も単純な正三角錐を一人1個ずつ作り、それを用いた自由な活動へと展開させる。

活動の特徴として、班ごとに協力し合って活動が進む。場所、とくに中庭（パティオ）の隅々に至るまでその特徴が利用された。後からワークシートに付されたタイトルを拾ってみると、「段を覆う謎の形」（図3-1）、「2階へ行こう」（図3-2左）・「幾何学的な形」（「六郭陵」）（同右）、「パティオにかけられた三角錐」（図3-3）、「またがる立体形」（「クモの巣」）（図3-4）、「中に入れる形」（「雄太ロボット」）（図3-5）などがある<sup>3)</sup>。

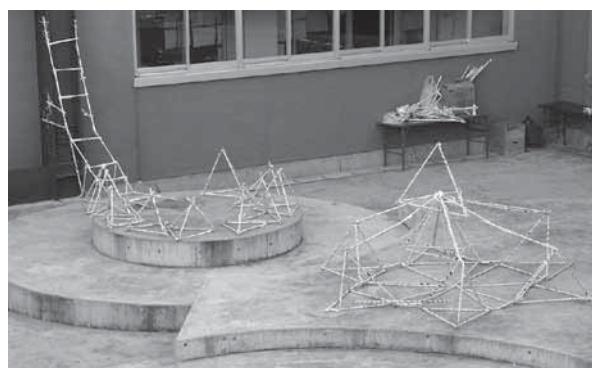
小学6年生が見つけた形として、パティオの空間を様々に利用し、元のデザインされた場の特徴を生かしながら造形活動が進む。



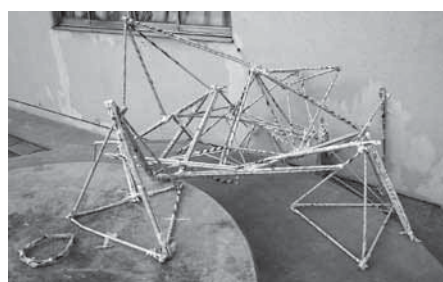
(図3-1)



(図3-3)



(図3-2)



(図3-4)



(図3-5)

### (2) ワークシートから

造形遊びでは児童が喜んで活動する。それは最初に主題を考えないでスタートする自由な活動であると同時に、子どもが体全体を使って澁刺と活動できるからである。子どもは俊敏な動きをするが、その動きが自由に活かされるのである。そうした感想が、児童からも多く寄せられた<sup>4)</sup>。

1年生は自分の目の前でできていく形から、周囲の空間も形とともに認識していき、その広がりによって空間を新たに感じていく傾向がある。子どもの視覚、触覚など知覚作用が造形活動と一緒に認識されていく、有り様が確認される。3年生になると、目の前の造形物を通して広がっていく空間感から、立体—立つ形に気付き、立たせる立体物—オブジェなどが作られる。同時に、一定容量の空間を作り出し、その中に必ず自ら入って、体全体でその空間を感じ取っている。彼らは大きな空間から、それぞれの場所を細分化したり、複雑な形にしていく。そうした活動のプ

ロセスが文章によって、ワークシートにも記されている。

6年生になると、中庭での空間の捉え方が隔々まで及び、さらに新たな空間そのものを造形活動によって生み出した。周囲が壁に囲まれた場所では、はしごを作って「2階へ行こう」という作品になったり、幾何学的な形を作ったりする。物体としての作品だけではなく、周囲の様子にも働きかけた新たな空間そのものを作り出しているのである。その事実、子ども自体も満足している様子がワークシートから多く確認される。そこでは造形活動の達成感が特徴的であった。

子どもたちの感想からは、そのほとんどと言ってよい程、彼らは造形遊びが楽しいと受け止めていた、事実が窺われる。そして一本の棒から様々な造形物ができていくことや、みんなの協力で達成感の得られる造形活動ができたことが、指摘されている。その中でも教師の次のような捉え方が象徴的である。それは普段あまり他者と関わりを持とうとしない児童が、積極的にグループ内で一緒になって、活動的であったことに驚いた、という指摘である。

そうした子どもの変貌ぶりを初めて見、それだけでも造形遊びの授業を行った甲斐があると言う。その事例は3年生だけでなく、6年生のケースでも存在した。授業者はそのような観点からも、造形遊びの意義を認めている。

### 3. 小学校教員をめざす大学2・3年生を対象とした実践

(1) 造形活動の実態 (大学2年50名 / 3年15名, 90分, 講義室, 「新聞紙を丸めた棒を使って」)

2015年小学校教員をめざす大学生, 2年生約50名を対象として本題材を実施する。それぞれ4~5人の班構成をし、活動する。広い階段教室でとくに特徴もない講義室であったが、思い思いに場所を見つけて造形活動が行われた。材料を作り、繋げていくことによってどのような空間づくりをしていったらよいのだろうか。班ごとに相談が行われ、次第に活動内容が明瞭になっていく。最終的にできていった形を以下に挙げたい。

オブジェのような三角錐を組み合わせた形 (図4-1), モニターやスピーカー, 入り口などを活用し吊して制作していった形 (図4-2・3・4), 段差や周囲の机・椅子 (図4-5・7), ピアノ (図4-6) などとも巻き込んで表現された。そこに存在する物を見出して活

用しながら、造形活動が多様に進み、同時に設置された。

これまで小1~6が発見した「並べる, 繋ぐ, 積む, 組み合わせる, 吊す, 揺れる形」など, 様々な行為による効果が短時間に総合的に扱われ, 形作られていく。小学6年生が見つけた造形遊び的行為を, 場所の特徴とともにさらに発展させていた。そうした中, これまでにない形として新たに見つかったのが, 3年生による手を離すと形自体のねじれから勢いがついて, 瞬時に「戻る」形である (図4-8a)。「たたむ」ことが可能で (図4-8c), 伸ばしたり (図4-8b), 元に戻る—それ自体に動きが生じる形である。



(図4-1)



(図4-2)



(図4-3)



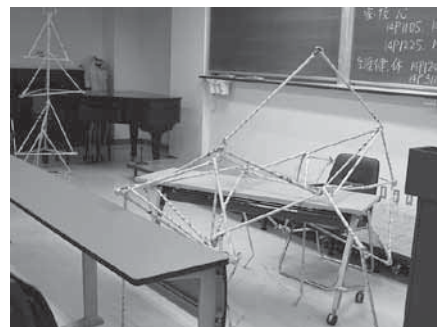
(図4-4)



(図4-5)



(図4-6)



(図4-7)



(図4-8a)



(図4-8b)



(図4-8c)



## (2) ワークシートに現れた造形遊び観の検討

造形遊びの活動が教育的に有効だと見なした学生は、ほぼ全員であると言ってよい。中でも造形遊びの意義について、「非常にある、ある、ふつう、よくわからない、ない」の5段階で尋ねると、ふつうと答えた学生は1名のみで、回収されたワークシートからは、非常にある38名、ある20名で、よくわからない、ない、と答えた学生は誰もいなかった。

造形遊びの本題材実践について好意的であったその理由として、「造形性そのものの良さ」、「体全体の感覚」、「材料との関わり」、「場所との関わり」、「協調性」に言及がなされた。それぞれについて学生の指摘する言葉を引用しながら、どのように造形遊びの意義と特徴を理解しているかを列挙したい。

「造形性の良さ」については、「最初からテーマを考えずに活動が進み、達成感があった」、「何よりも楽しかった」、「空間に対して別の見方ができるようになる」、「自分の予想もしなかったものが完成していく時の楽しさ」、「完成という終わりがなく、際限なく想像が膨らんでいく実感がある」、「造形遊びには終わりがいい。完成形がないため、失敗もないし、もっとこうしたい、ああしたいという思いをぶつけられるのが面白かった」、「設計図のない作品づくりが新鮮」など、最初に主題を考えずに材料の扱いからスタートし、そこから思い付いたことを試しながら、造形が発展していく活動の有り様が、実感とともに好意的に捉えられている。

「体全体の感覚」について、体を動かして造形することの良さが指摘されている。「体全体を使うことにもなるので子どもにとってとても大事な活動」、「座ってもできるかなと正直思っていたが、やっていくうちに楽しくなり、自然と立ってやるようになっていて、その点でも面白いと感じた」。

「材料との関わり」については、1名のみ事前に準備する必要性と、丈夫にするためには3枚重ねてもいいのでは、という意見があったが、ほとんどの学生が新聞紙は「身近ですぐ手に入る材料」、「柔らかく軽いものなので、子どもたちにも扱いやすい」、「繰り返し使え、リサイクルなので環境にもよい」と指摘した。紙を棒状にすることについては、「大きな造形を簡単につくることができる」、「簡単なので誰にもできる」、「思ったより頑丈なものになる」、「棒状であれば早く片付けられる」。また両端をリングにした材料の特徴について、「新聞紙をくるくるまるめて、あんなに大きな立体ができると思っていなかった」、「リングをつ

くすることで、接合がしやすく造形しやすい」、「リングにだけつなげるという条件設定がよい。活動に少し制限をつけることで、その中で創意工夫が生まれる」と述べている。棒とリングの条件による材料としての取り上げ方が良かったことについて、多くの共感が得られた。とくに本材料では体全体で立ち向かう、大きな造形に展開していきやすいところが評価されている。

「場所との関わり」について、「場所からイメージが広がったところが面白かった」、「空間をうまく活かして行こうところがよい」、「教室、教室周辺全てを利用していいこと、そのことによって、普段気にしないようなでっぱりや、本来の用途以外で作品の一部になる面白さがあった」、「(吊して) 空中で作品を作るのはとても楽しかった」、「場所からイメージが広がった」、「空間に対して別の見方ができるようになる」など。

「協調性」については、「協力して一つのものを作り上げることのできる楽しさや達成感を感じることができ」、「友達と活動することで単純に楽しかった」、「友達との交流がさらに深まる」、「互いに刺激し合っ

て一つの作品をつくることができた」。

## 4. 現職教員に対する実践—弘前市研修会、免許状更新講習

### (1) 造形活動の実態

弘前市図工・美術研修講座には小・中現職教員が12名集まり、「みんなで造形遊び」展の会場(弘前市立百石町展示館)で研修会を行った。ワークショップに参加して頂く。

また、免許状更新講習では、小・中・高校教員、特別支援1名を含む26名の受講者が集まった。講義内容の予定として、造形遊びの実践をすることは念頭にはなかったが、これまでの実践や展覧会に言及した所、ぜひやってみたいという要望が出て、造形遊びが実施された。

「造形遊び」の活動では、面識のない者同士4~5人で6班を作り実践する。果たして造形活動が進むのかどうか疑問であったが、実際には大いに進み、ダイナミックな造形が短時間になされていった。その一部を紹介する。その中で注目したいのは、大学生の実践で最後に偶然できた「たためる形」である。それはハ

ンモックのように一隅を横にまたがらせ、そこにさらに装飾的に吊した作品である（図5-1）。床から天井まで、また壁から壁へと大規模に空間を活かす活動がなされた（図5-2・3）。



（図5-1）



（図5-2）



（図5-3）

## （2）ワークシートに現れた造形遊び観の検討

現職教員の本題材に対する見解が40名弱得られたことになる。その中でほぼ全員から、今回の材料を使った造形遊びについては、肯定的な評価を得ることができた。

ちなみに中学校や高校には「造形遊び」は存在しないのであるが、その教育効果を授業に取り入れてみたい、という見方がある。中でもある教師の次の文を引用したい。本造形遊びについての関わり方、並びに造形遊びに対する教師の視点から、評価がよくわかるからである。「本時のように、紙を丸めて棒を作り、三角にして繋げていく造形遊びを以前、1・2年生の複式学級でやったことがある。その際も、子どもたちが盛り上がり制作していたが、その時は、紙を本時のようななめに丸めて紙の端はセロテープでただ止めるというやり方にした。今回紙の端を丸めて輪にすることで、棒同士が動くようになり、それが新たな造形活動（ゆらす、たたむ、巻くなど）を生み出していることを体験し、同じ素材・同じような方法でも、教材研究をつきつめることで、もっと豊かな活動を子どもたちに保証できるのだと、改めて感じた。材料の持つ可能性を発見するのは子ども達自身だが、その種と

るべきものをたくさんもった素材と出会わせたいものである。教科書には学年に応じて様々な造形遊びが掲載されているが、今回の紙の棒のように魅力的な素材であれば、どの学年・年齢で行っても、それぞれの発達段階に応じて、子どもたちが興味をもって取り組むことができるのだと教えられた。なかなか時間的・場所的制約などがあり、ダイナミックな活動をさせてあげられないという悩みもある。が、造形遊びには造形的喜びを得る以外にも、達成感や仲間との協力、自己肯定感など、様々な喜びを子ども自身が手に入れることができる活動だと思うので、丁寧に実践していきたい。落ちつかない問題行動の多い子どもが多い学級ほど、造形遊びをするにあたっての困難さもあると思うが、そのような子どもこそ造形遊びを通して学ぶことも多いのでは、と感じた」。

参加した全教員が、造形遊びは最初に表したいことを見付けてから表現する内容とは全く別であることを、すなわちまだイメージのない状態から始まる活動であることを、理解している。そこでは材料開発の必要性、場所への配慮、そして協調性を学べることが大事だとして、自覚されている。

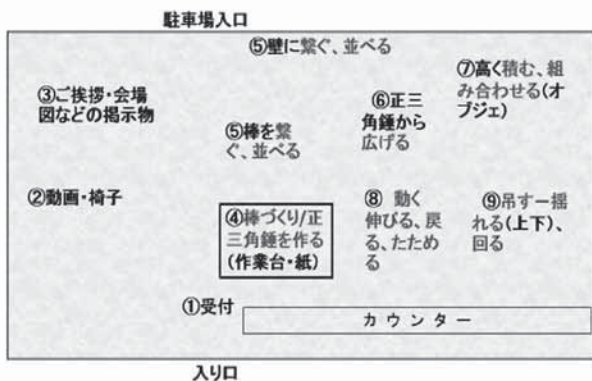
## 5. ワークショップ「みんなで造形遊び」展を通して

2016年8月1～3日にかけて、「みんなで造形遊び」展を企画し、弘前市立百石町展示館で開催した。小学校図画工作科の表現内容として、絵や立体、工作の他に、「造形遊び」のあることを理解してもらうことを意図しており、パブリックスペースで多くの人たちと造形遊びをしてみようというものである。

本展覧会のコンセプトについては、展示場に掲げた次の「ごあいさつ」にまとめられているので引用したい。「本展覧会は、小学校図画工作科の内容である『造形遊び』について取り上げ、その活動について紹介するものです。『造形遊び』は、材料や場所の特徴を基に活動していきます。昭和52年に幼稚園との連携の観点から小学校に導入され、平成10年の学習指導要領の改訂では、絵や立体、工作の活動と並んで全学年に取り入れられました。しかしながら、小学校高学年（5・6年生）については、その授業の難しさについて現在も課題になっているところです。本展覧会では、材料に使用済みの紙を丸めた棒を使って、みんなで『造形遊び』をする場を設定してみました。材料を使って、並べたり、繋げたり、組み合わせたりする行

為から造形活動を進めていきます。是非お楽しみください。尚、2015年に行った弘前大学教育学部附属小学校1年、3年、6年生と、小学校教員を目指す弘前大学教育学部2・3年生の授業実践の一部を動画にまとめてありますので、併せてご覧ください。まずは、紙を丸めた一本の棒をリングで繋いでみませんか。そしてその形が放つ空間を感じてみませんか。

展示については、本来、鑑賞すべき作品が始めに存在しない点をどのように補ったらよいのかが、課題であった。これまでの実践の結果として、小学校1年、3年、6年生と大学2・3年生の有り様については動画にコンパクトにまとめて、実際の授業場面、活動の様子が見られるように準備する。そしてその成果として、本題材を活用したことによる結果を、会場にも明示した(図6-1)。まず、紙を丸めて材料を作る場所を設定する(図6-1④)。そうして、行為で活動が展開していくように会場を構成する。すなわち、⑤棒、三角形、三角錐を「繋ぐ、並べる」、⑥三角錐から「横に広げる」、⑦高く「積む、組み合わせる」(オブジェ)、⑧「伸びる、たためる」形、⑨吊して「上下に揺れる、旋回する」形と、会場にコーナーを作りながら、鑑賞者の興味・関心に合わせて、作りたい場所で活動をさらに展開してもらったのである。⑤に関しては、大きな白い壁面も設けた。自由に繋げる活動から形を描いてもらう。⑤～⑨も基本形を作り、展覧会が始まる前の準備として、会場に設置した。その実際の会場が図6-2である。



(図6-1)



(図6-2) &lt;準備した会場風景&gt;

3日間の展覧会であったが、保護者が子どもを引率して訪れ、2歳から小学校6年までの子どもたちが集まった。この場所に彼らが入って動き出すと、場が息づいた(図6-3・4)。子どもたちはまず展示してあった形に触り、その仕組みを確認したり、中を通り抜けたたり、体ごと関わっていく。1日目に来訪して興味を持ち、3日間続けて来たケースもある。その彼ら(小4と6)の様子をみると、1日目は、会場の一角に空間をとりオブジェを作った。また翌日やってくると、それらを全部こわしてその上でダイビングしたり中に潜ったりする活動を見せる。3日目には一からまた作り出し、「中に入れるような立体」—最後に「ペーパー要塞」と名付けたお城のような形を作り上げた。しかもその形はたためるという特徴があるため、最後には持ち帰ろうとしていた。居合わせた子どもたちがその中に入って記念写真を撮る(図6-5)。



(図6-3)



(図6-4)

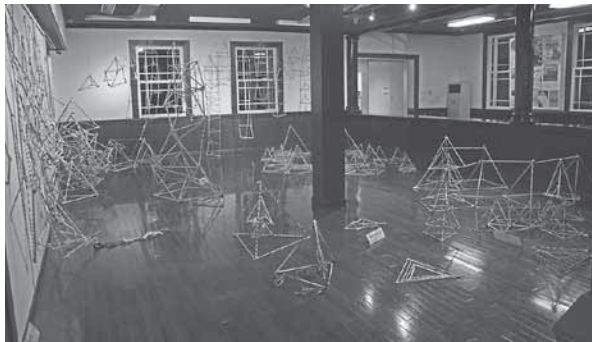


(図6-5)

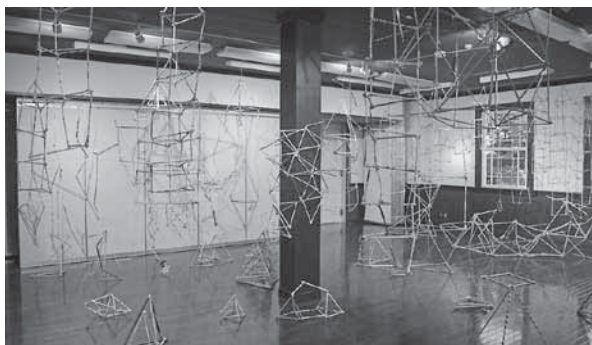


一方、子どもの活動だけではなく、保護者との共同作業も行われた。親子で一緒に造形活動をし、できた形を持って帰る。「たためる形」を保護者が作り、子どもが飾りをつけて装飾したり、親が丸めて準備した棒で子どもが形づくるなどである。そこでは幼児の姿が特徴的であった。自分でまだ積極的につくことはできないものの、強い興味を示して棒を丸めてみたり、別に描いたものを貼り付けたり、テープで結びつけたりしていたのである。

そうした中で注目されるのは、本展覧会の主旨でもある会場空間が変容していった点である。準備段階（図6-2）から、第1日目の夜（図6-6）、第2日目、第3日目の最終日（図6-7）と変化していった。図6-7は、最後に会場に展示していた形を活用して、全てを上から吊したりして会場の空間全体を意識的に変えてみた場面である。



（図6-6）＜第1日目の夜＞



（図6-7）



（図6-8）

本展覧会では、基本的に会場の空いている場所で子どもたちが自由に造形活動をしたが、その都度、多少整理して場所を整え、毎日子どもたちを迎え入れた。そのため、毎回会場風景の基本形として図6-2に、ある程度リセットしながら3日間続けたことになる。途中、「中に入れるような立体」（小4・6）をつくったり、川をイメージして紙の長い棒を連結させるといった子ども（4歳児）もいた。人が往来するため、そのままにしておくことが許されないケースもあり、子どもたちが帰ると、元に戻すなどして会場にはスタッフの手が入った。ただし、一日の活動が終わった夜の会場風景に見られるように、毎日新しく生まれた形は会場に痕跡が留まるようにしていったのである。

今回、本材料でメインとなった形は「伸びる・戻る（たためる）形」で、来館者もこの形に最も興味を示した。さらにそれを長さを変えて輪ゴムを使って窓際に吊したことから、上下に伸び縮みし、また回すと揺れるため動きが伴った（図6-8）。この形を最後には窓際だけではなく、なるべく会場全体に吊すという試みをしたのである。また柱にも巻き付けた。全く異空間となり、展示としても楽しく面白い空間となったと思われる（図6-7）。

来館者の反応を見ると、今後このような最後の展示から展覧会をスタートさせることも考えられる。つまり、最初からこうした展示を会場全体に施して、さらに何もないスペースを別に用意し、子どもたちが一から場を作れるようにするなどである。

## （2）ワークシートに現れた造形遊び観の検討

本展覧会を終えてみて、寄せられたコメントから次のようなことが言える。材料については、子どもたちはチラシで立体として最も単純な形である三角錐を作ってみて、そこからいろいろな幾何学的な形ができあがることに、驚きを持って取り組んでいる。保護者からも実に良い体験になった、という見方を得た。また、展覧会そのものの企画についても、主旨が届いたとの反応を見ることができた。下記に参考として列挙する。

- ・チラシで三角錐を作ってみて、そこからいろいろな形をつくり出せることにびっくりしました。チラシでぼうを作るだけではなく、何個もぼうを組み合わせで好きな形を作ることができて楽しかったです。（小6）
- ・細く丸めた紙を繋いだり組み合わせることで、子どもから大人までが興味をもって立体造形に取り組む



ことができる点で、秀逸な企画だと感じました。また、両端を折ってテープで貼る作業を通じて、触覚や視覚などの空間把握に必要な感覚を伸ばすことができること、さらには作られた形から様々な連想を繰り返して作りたいものの形を考え出す作業へと発展していくことが確認でき、「造形遊び」がもたらす子どもたちへの教育効果を期待できるようにも思われました。楽しく作業できることが、さらなる取り組みにつながっていくので、興味深く子どもの様子を見ていました。(保護者)

- ・3日間、遊びに來させていただきました。失敗してはまた新たなものを作り出し、子どもたちの想像力が尽きることはありませんでした。今回のような紙との触れ合いは、とても楽しい体験となりました。(保護者)
- ・輪を作ること動きが出て、いろいろな角度を偶然見つけていくとても魅力的な題材です。それをゴムをつけて吊したり、別の素材の色紙が付け足されていくなど、空間の広がりに対して子どもの創造力を掻き立て、無限の造形遊びへと発展させる要素がたくさんでした。たためるというのも幾何学的模様や立体の不思議を感じさせます。小学校(低・中・高)、中学生や大人まで色々な楽しみ方ができる芸術ですね。(小学校教諭)
- ・大人も子どもも夢中になれる造形遊びの醍醐味が味わえる楽しい展覧会になっていると思います。先生や学生と触れ合って子どもたちの気づきもどんどん広がっていました。家やタワーのような大作もできて子どものパワーってすごいですね。(小学校教諭)
- ・すばらしい展覧会でした。一本の棒が予想もつかない作品にひろがっていく。それも平面に、立体に。あらゆる方向に向かっていく様子は、挑戦的でもあり、大変魅力に満ちたそして未来を感じさせるものでした。生きるエネルギーも感じさせます。この創造的な営みをぜひ次世代の子どもたちにつなげていって欲しいと思いました。(一般)
- ・今回の企画は、「造形遊び」そのものを展示するという取り組みであり、来場者に「造形遊び」とはどんなものであるのかということを知らせる契機になったと考える。また、作品を展示するのではなく、行為を展示するという試みは、今後の可能性を示唆している。今日、ワークショップやギャラリートークなど、参加型の展覧会も増えてきている。ワークショップを大事にするのであれば、時間帯や参加人数などの枠組みを決めて集客する方法も一つあると

思うが、会期中に、来場者みんなで作っていくという事が意図されていた。どう変容したのかをまた観にくるというリピーターも生んでいる。(中学校教諭)

## 6. 造形活動と空間把握の考察

これらの実践結果から、本題材の性格と意義についてどのようなことが言えるだろうか。

### ①材料の与え方

体全体を働かせてほしいとの願いから、子どもの年齢に応じて紙の大きさを変えるが、基本的に大きめの紙を与えることが望まれる。紙の材質と大きさとして、小1では巻きやすいB3サイズのチラシ、小3では厚手のB3、A3サイズのポスター、小6では強度を求め、新聞紙を広げて2枚重ねて巻く。また材料の特徴については、棒の両端を折り曲げてリング状にし、そのリングに通して棒を繋ぎ、造形していく。リングの幅を緩くすると、動きが生まれ、また狭くすると固定した立体物が作りやすい。最も単純な形である正三角形や、立体である正三角錐を作ってみる。そこから発想に応じて、自由に形を変えていってよいことにする。

材料は小学生だけではなく、一般市民からも広く興味・関心が寄せられた。とくに繋ぐ形から立体物(オブジェ)へと展開した。さらに材料の特徴であるリングの効果を最大限に活かして、「伸びる、戻る、たためる形」が発展的に生まれる。予想を超えて、機能を伴った造形が新たに追求された。

### ②場所との関わりー空間認識

子どもは作ったものを身につけたり、その長さで周囲との距離感を測る。教室から廊下、中庭へとより広い場所が必要になり、彼らの身体全体の感覚が発揮された。頭にかぶったり、身に付けたり、巻き付けたり、全身で材料に触れて大きさや長さなどを直に感じ取っている。触覚を通して空間を認知する児童の特徴がよく見えたのである。

また、作ったものを使って場所の奥行きや、広さを実感している。作りながら見つける空間感や、周囲との特徴的な関わりが重要性を帯びた。小学校高学年になるとさらに進み、与えられた空間で場所の特徴を隅々まで生かしながら、活動することができるようになる。場所の特徴を生かして、全体的にバランスの図られた造形が追求される。

### ③小学校で造形遊びが必要な理由

これらの造形遊びの実践から判明するのは、大学生や大人と比較しても、小学6年生までの造形遊びによる活動が教育的に重要だ、ということである。それまでに活動の基となる、諸行為における造形的特徴が出揃っているからである。

1年、3年、6年生のそれぞれの活動では、身体的発達に合わせて造形の規模や複雑さ、それを取り巻く周囲の空間との関係、などが違ってくる。視覚や触覚を通して、造形感覚とともに発達していくのが、空間認識（認知）力である。大学生や大人の造形を見ると、材料を使って自然に空間や場所を統合的に捉えた造形活動がなされている。

大人も同一材料を使って造形遊びに興じたが、成長した大人の造形活動を基準にして振り返ると、基本的な行為がすでに小学校6年間で行われていることがわかる。とくに彼らの成長過程において、自分を取り巻く周囲との関係性を身体で感受することは、子どもの成長にとって大事なことは言うまでもない。児童はその成長段階において指や手を動かし、できた形を周囲との環境の中で、一つひとつ確認し感じ取りながら、より複雑に造形していくのである。

しかも試行錯誤を繰り返しながら、全体的なバランス感覚を養っている。その活動は、造形的空間を創り出すことでもあり、作品と一体化する空間を認識する上でも重要である、と確認された。

## 7. おわりに—造形遊びの教育的意義

紙を丸めた一本の棒と、リングで繋ぐ方法から思いがけない多様な形が生まれた。このような活動は、身体の成長とともに育成されるべき空間認識にとって、有意義な行為となる。「造形遊び」は図画工作科における表現の一つに位置づけられているが、その独自性は造形活動とともに空間認識（認知）力が、育まれる点に見出される。また、そこに子どもの成長に不可欠

な造形的活動として、教育的意義が認められるのである。

加えて、造形遊びの特徴として、学級内の班活動ではもちろんのこと、学年をまたいだ活動ができたり、展覧会のオープンスペースで子どもたちの協働による自由な活動が、自然な形で見られた。このように協働性が育成される点も大きい。児童の感想のみではなく、大学生や教員、保護者もその教育的意義を認める声が確認された。

造形遊びでは、テーマ性よりも材料に触れながら、造形行為が優先される。その中で気づいたことから、空間（環境）を感じ取る造形をしていく活動のあり方が、再確認された。それは主題表現との対極をなす造形活動として、表現の幅を保証する活動にもなることが、改めて認められたのである。

## 註

- 1) この実践結果については、材料と指導法を巡って既に考察している。拙稿「造形遊びの実践的考察—材料と指導法をめぐる—」（堤司，下山明子，小田桐光佑との共著），弘前大学教育学部研究紀要クロスロード第20号，2016，pp.29－38参照。尚，本稿では論文の主旨からこの実践を概括的に引用し，写真図版を一部転用した。
- 2) 開隆堂教科書『図画工作5・6下』，2016，p.19及び日本文教出版教科書『図画工作3・4下』，2016，p.27参照。
- 3) 活動終了後にワークシートの記載を求めたため，作品を示す呼称は班内でもそれぞれ異なっている。括弧内の名称は，活動後に想起されたり，何かに見立てられた児童の作品名である。
- 4) 小学生の感想については，1)の前掲書に掲載。

【付記】本稿は，平成26～28年度科研基盤研究（C）「小学校におけるアート空間に関する研究—材料・場所・空間の問題を中心として—」（課題番号26381170）の研究成果の一部である。

（2017. 1. 12 受理）